中國散文論

吉川幸次郎

筑摩叢書 48

中國古典の散文がどのような構造を持っているか。その簡潔で暗示に富んだ文体、音韻と形式の上での美しい装飾性などを、古今の文章を例として論じて、中國古典文の表現能力を分析する。中國文学の愛好家には必読の書。

筑摩書房　￥380

筑摩叢書　48

中國散文論

吉川幸次郎

吉川幸次郎（よしかわ　こうじろう）

1904年　神戸に生まれる
1927年　京都帝国大学文学部中国文学科卒業
著　書　――「杜甫私記」「元雑劇研究」「支那人の古典とその生活」「新唐詩選」「詩経国風」「宋詩概説」「元明詩概説」「三国志実録」「詩と月光（中国文学論集）」「漢文の話」その他

中国散文論　　筑摩叢書 48

昭和41年1月20日発行

¥ 380

著　者　吉川幸次郎
発行者　古田晁
発行所　株式会社 筑摩書房
東京都千代田区神田小川町2の8
電話　東京(291) 7651番(代表)
振替　東京4123番

© 1966

多田印刷・山晃製本

自序

文学は、高次の言語である、ということは、その定義の一つとなり得るであろう。ただ高次の言語たる道には、二つの方向がある。

一つは、高次の事実を構想することによって、高次の言語となることであり、また一つは、言語表現の形式を高次にすることによって、高次の言語となることである。前者は人間の空想力により、後者は人間の言語力による。前者は小説の方向であり、後者は詩、それは言葉の最も広い意味に於いて、詩的散文をも含めていう、詩の方向である。

民国初頭、文学革命が、過去の伝統に訣別するまで、中国文学の歴史は、後者の方向にあったと、私は考える。小説の発生が、ヨーロッパに比して、甚だしく遅いこと、また発生してのちも、地位を得難かったこと、しかく小説が蔑視されたのに対し、正統の文学として尊重されたのは、歴史叙述の散文と抒情詩であったこと、而してそれら詩文の文学は甚だしく修辞的であり、ひとり抒情詩のみならず、散文も詩的散文たる傾向がつよく、修辞的であることによって高次の言語であったこと、いずれもこの文学史に於ける顕著な事実である。またそのことこそは、この国の過去の文学が、世界文学史の上にもつ重大な、そうしておそらくは貴重な、意義である。私は近

き将来に於いて、一書を著わし、やや系統的にそれらのことを叙べ、「中国文学序説」と、名づけたく思う。

この冊子に収めた諸論文は、そこまで系統あるものではない。以上のような認識に赴く過程として、折にふれて書きとめておいたものの集録である。執筆の時期は一でない。従って論旨には、重複がある。また最も早く書いたものと、最も近く書いたものとでは、私の態度も、やや移っている。早い時期のものでは、私は一応、価値判断を度外視して、中国文学を、その歴史的な様相に於いて眺めることに傾いているが、最近の私は、この文学の中から、永遠に、普遍に、人類の宝となるべきものを、発見し解説せんとすることを、より多く意識としている。故我はすべて今我の形成にあずかっている。しかし故我は必ずしも今我でない。私は、この冊子に収めた諸篇につき、執筆の時期と趣旨とを、記しておく義務があろう。

冒頭の「中国文章論」二篇は、昭和十七年の末から翌春にかけて、雑誌「文学界」に寄せ、雑誌停刊のため、その全部は登載されなかったものである。修辞によって高次の言語たらんことを欲したこの文学にあっては、文体論こそ、最も重要な地位を占める。而してここに指摘した二つの性質は、そのまた最も重要な部分であると信ずる。ただ装飾性の各論として、対句の問題、典故の問題については、詳論するに至っていないが、次の著述に於いて、その機会を期する。なおこの論文は、演述の体をもって文を行っているけれども、講演の速記ではない。私自身で稿を起

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

したものである。私は、暗示的、装飾的であった故に口語と乖離し易かった中国の過去の文体に対し、日本語に於いては、口頭の言語をどこまで文字にのぼせ得るか、その可能性を体験せんとして、わざとこの体を用いたのである。もしその文体の浅易さの故に、内容もすべて浅易であると即断する人があるならば、私は謹んで不敏を謝するほかはない。

次の「世説新語の文章」は、最も早い。昭和十三年に執筆して、東方文化研究所の「東方学報」に登載した。中国の文体論を試みた始めである。また私が日本語で論文を発表したのは、殆んどこれが始めである。

「六朝助字小記」四篇。「世説新語の文章」に対する実証を充足せんとして、当時あつめておいた資料にもとづいて、昨昭和二十一年に執筆し、雑誌「知慧」に寄せた。なお数篇もしくは十数篇を続成する積りであったが、最近、後進の人でほとんど同じ研究に従事する人が出て来たため、その成功に期待して、一応、筆をここにとどめる。

「中国語に於ける否定の強調」。これも「世説新語の文章」の余論であって、昭和十三年十月十六日、大阪懐徳堂に於ける大阪漢学大会で講演し、それをまたみずから筆述した。他人による講演筆記ではない。

以上が文体論ならびに文体論に附随した文法論であって、この書物の第一部である。

第二部は小説論であるが、この部分も執筆の時期にへだたりがある。「中国小説の地位」は新

しく、昭和二十一年一月、雑誌「新潮」に寄せた。「中国小説に於ける論証の興味」は、それに先だつこと五年、昭和十六年一月に脱稿し、「中国小説論」と題して、雑誌「思想」に寄せた。「『志誠張主管』評」も、ほぼ同時の作であって、十五年の除日に脱稿し、雑誌「国語・国文」に寄せた。この三篇の論文に於いて、私は、中国の旧小説がその特殊な地位から受けた限定、いわばその消極面ばかりを説くに急である。中国の旧小説が、別にもつ積極面、私はそれをも説き得る日を、将来の私に期待している。なお「論証の興味」篇が資料とする「錯斬崔寧」と、「志誠張主管」全文の翻訳は、別に刊行する「宋人小説」に収める。

「曾樸氏の翻訳論」、これは小説論の附録である。最近、昭和二十二年の七月に執筆し、雑誌「世界文学」に寄せた。始めに述べたような特殊な伝統が、この国の文学の世界に、数千年にわたって持続したのは、他の地域の文学と接触する機会に乏しかったからである。それが始めてヨーロッパの文学と接触した時期に於ける反応、それを説いた小論である。

以上、第一部、第二部、方向は異なっているけれども、要するに散文芸術に関する論議である。この書の総名を、「中国散文論」と題する所以である。

最後に収めた「漁洋山人の秋柳詩について」は、詩論である。散文論と題するこの書に於いては、附録である。執筆の時期は甚だ早く、昭和十四年の九月、「東亜論叢」第二冊に寄せた。私が中国の詩について書いた文章は、この一篇のみではない。この論文の末尾にもいう様に、「詩は

中国人の文学活動のうち、最も重要と自覚されて来たものである」と、私は考えている。またその散文も詩的散文たる傾向が強い以上、詩に対する認識は、この文学全体に対する認識の基礎であるとも、考えている。そう考える私は、最近、杜甫の詩について、数篇の研究を草した。しかしそれらは別に専書を成す予定である。また杜詩の附帯として説いた王昌齢論は、既に前著、「唐代の詩と散文」に収めた。故にここには収めない。且つ、近ごろ杜甫を説き、王昌齢を説きつつある私と、この篇を草した頃の私とは、すこし逕庭がある。現在の私は、中国の詩が人類の宝となるべき積極面を、主として杜甫によって説かんとし、「漁洋山人の秋柳詩」に於いては、このジャンルの推移の歴史が、興味の中心であった。そうしてむしろその消極面を説く形となった。当時の私も中国の詩の積極面を説くことに、志がなかったわけではない。ただ私の非才を以てしては、そのことが甚だ困難なるべきを思い、躊躇し矜慎して、この minor poet について小論を試みるに止めたのである。しかし今は敢えてその躊躇を押し切っている。両類の文章は、一類となり難く、他の詩論集には附し難い。故にここに附する。ただ私は、この文章が、同志の人に向って、無用であるとは、考えない。ゲーテは、ペルシャの詩を資料として、東方の詩の長所と短所とは、紙一重であり、一物の両面である、従って minor poet ではその短所となって現れるものをも省察しなければ、第一流の詩人の偉大さを、十全には理解し得ないと、説いているそうである。ゲーテのこの洞察は、中国の詩にも妥当すると、観察されるのである。

前著のうち、この書物全体と最も多く関連するのは、教養文庫版「唐代の詩と散文」である。

昭和二十二年十二月

吉川幸次郎

目次

自序……一

第一部　文体について

中国文章論……二
一　その暗示性について……二
二　その装飾性について……三八
世説新語の文章……七四
六朝助字小記……一〇〇
定……一〇〇
将無、将不、将非……一一四
頗……一二七
何物……一三四

中国語に於ける否定の強調……一四八

第二部　小説について

中国小説の地位……一五九
中国小説に於ける論証の興味……一七三
「志誠張主管」評……一九九
曾樸氏の翻訳論――フランス文学と中国――……二三〇

附篇　詩について

漁洋山人の秋柳詩について……二四七
改版あとがき……二六五

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

第一部　文体について

中国文章論

一　その暗示性について

中国人の意識に於きましては、文章の生活、すなわち言語文字の表現せんとするものを言語文字に表現するといういとなみは、人間のいとなむ諸生活のうち、最も重要なもの、といっていいすぎならば、最も重要なものの一つとして意識されて来たようであります。そうしてその結果、文章こそは人格のもっとも直接な象徴として、中国人の生活、少くともその過去の生活に於きましては、甚だ重要な位置を占めました。

このことを最もよく現しますのは、いわゆる「科挙」の制度であります。科挙とは高等文官試験制度でありまして、その萌芽はごく早くからあり、のちやがて宋のはじめ、すなわちA・D・一

〇〇〇年頃から、つい最近清朝の末年、すなわち今世紀の初頭に至るまで、最も安定した制度として持続しました。この制度の精神は、社会の道義と文化の維持者としての能力と責任をもった人物、そうした人物をこの国の言葉では「士人」「士大夫」「読書人」などと呼びますが、そうした「士人」「士大夫」「読書人」たる資格あるものを、官吏候補者として、一般人の中から選び出すというのが、この制度の精神でありましたが、試験課目の中心となったものは、何であったかといいますと、常に作文の能力でありました。只今の日本は法科万能といわれておりますが、過去の中国は文科万能であります。そのことを雨森芳洲（あめのもりほうしゅう）は、次のように批判しています。

もろこしの科挙といへるは、その国のいきほひなれば、やむことをえずかくはすれど、もとくはしき法といふにはあらず、およそ人をとるは、そのこゝろおこなひをこそ見るべきに、文つくらせて、其ふみのよしあしにより、人からのたふときいやしきを、きはめたらんには、ふみはたくみなれど、其身は用ふるにたらざる人、いかほどもあるべし、

芳洲の批判の是非はともかくとして、「其ふみのよしあしにより、人からのたふときいやしきを、きはめ」る制度が長く存続したことは、事実であります。

こうした重大な意義をも、その社会に於いてもった中国人の文章、それはどういう特殊な性質を示すか、それを私は考えつづけております。むろん特殊といいましても、それは究局に於いては、他の民族の文章にも共通して存在する性質でありましょうが、中国人の文章に於いて特に強

度に認められるものは何か、それを考えているわけでありますが、ここにはそうした特質の一つとして、その暗示性についてお話することと致します。

暗示性①といいますのは、表現せんとするものの全部を、文章の表面に表そうとはせずして、なるべく控え目にいう、もう一ついいかえれば、表現せんとする事柄のうち、その頂点だけを指摘し、あとは読者の想像にまかせようという性質であります。こうした性質は、中国歴代の文章が、多少ともに帯びるものでありますが、ことに顕著にこの傾向を示しますのは、唐の韓愈（七六八―八二四）、すなわち韓退之の文章、もしくは韓退之によって創始され、宋代以後、中国近世の文章の正統となったいわゆる「古文」でありましょう。いまその具体的な例として、韓退之の「李元賓墓銘」という文章を、挙げることと致します。李元賓というのは、名を観といい、やはり文章家であり、韓退之の親友でありましたが、若くして夭折しました。その墓に銘を書いたのが、この文章でありまして、銘の部分は韻文でありますが、銘の前には散文の序がついております。

李観字元賓、其先隴西人也、始来自江之東、年二十四挙進士、三年登上第、又挙博学宏辞、得太子校書、又一年、年二十九、客死于京師、既歛之三日、友人博陵崔弘礼、葬之于国東門之外七里、郷曰慶義、原曰嵩原、友人韓愈、書石以誌之、辞曰、

これだけが序であります。次に銘は、

已虚元賓、寿也者吾不知其所慕、夭也者吾不知其所悪、生而不淑、孰謂其寿、死而不朽、孰

謂之夭、已虚元賓、才高乎当世、而行出乎古人、已虚元賓、竟何為哉、竟何為哉、

以上が、「李元賓墓銘」の全文であります。いまその大意を、徳川初期の儒者、鵜飼石斎の旧訳にもとづきつつ、訳出しますれば、

李観は字を元賓という。その先は隴西の人なりき。始めて江の東より来るや、年二十四にして進士に挙められ、三年にして上第に登りぬ。又に博学宏辞にも挙められ、太子の校書を得ぬ。又に一年、年二十九にして、京師に客死す。歛をはりてのち三日、友人博陵の崔弘礼、国の東の門のそと七里なるに葬りぬ。郷を慶義といい、原を嵩原という。友人韓愈、石に書して誌す。その辞に、

やんぬるかな元賓、寿なるものは吾れ其の慕うべきゆえを知らず、夭なるものは吾れ其の悪むべきゆえを知らず。生きても淑からずんば、孰かそを寿なりと謂わん。死しても不朽ならば、孰かそを夭なりと謂わん。やんぬるかな元賓、才はいまの世にひいで、しかも行いは古人にもすぎたり。やんぬるかな元賓、はたしていかんせんとはする、はたしていかんせんとはする。

大意は以上のようになるこの文章は、甚だ暗示的であると考えます。少くともその序の部分は、そうであります。そもそも墓の主なる李観元賓は、作者韓退之の親友であります。この同志の友の夭折に対し、作者がいかに哀惜の情を抱いたかは、想察に余りあります。ところで、そうした

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com